

蛇にねらわれたはたおり娘

むかしむかし、機織りの上手な娘がいたんだとお。朝はやくから夜おそくまで、トンカラリトンカラリと機を織っていたんだとお。

ある晩、いっしょうけんめいに織っていると、雨戸を少しづつ開けるものがあると思っていると、障子に男の影がちらりとうつつたとお。そしてかすかな声で「開けてくれ、忍んでやってきた。」という。娘はその声を聞いてどんな男が夜ばいにきたかと、そつと障子を開けたんだとお。ところが目のさめるような美男子で、「なあ、これから毎晩あいびきにくるからだれにも言ってはならぬいぞ。」と機を織る近くにきて、娘と親しげに話をして帰っていったんだとお。娘はその男の姿が目にはらついて、それから夕方になるとそわそわ心も空になったんだとお。毎晩こうしてあいびきが続いたんだとお。そうしているまに娘の血色がすぐれなくなつたのに気づいた家の人は、何かあるとこつそり戸のすき間から、機を織る娘の部屋をのぞいたら、娘は親しげに話をしているがだれもない。みると一匹の蛇がきりきり機場をまいて、時折り舌を出しているのが見えたんだとお。「これは娘の命があぶない。蛇にねらわれている。」そう思って、この仲をさいて蛇を遠ざける工夫はないものかと、あれこれ思案したんだとお。ところがそのときはもうとつくに二人の仲はすすんでいて、ぬきさしのならないところへ追い込まれていたんだとお。ある晩、娘の寝床に忍んできた男は、娘をくどき落して二人でいいかわし、娘は男のたねを宿していることに気づいたんだとお。娘はお腹が大きくなり、ついにどつと床に寝たつきりになってしまい、はては物も食わずに思いにふけている様子。